

作り出している。パウル・クレー・センターの中は整然とした雰囲気である。三つの波の一番右側には事務室があり、真ん中あたりには広々としたショップ、左端にはカフェスペースがある。展示室ではクレーの作品が常設され、また、クレーに関するその時々テーマを設けた展示も行われる。地下には子供のためのスタジオ「クレアヴィヴァ」もあり、さまざまなワークショップに参加する子供たちの元気な顔を見ることができる。私が訪れたとき、展示室ではピカソとクレーを対比する展示が行われていた。ピカソとクレーは同



パウル・クレー・センター

時代に生きた画家であり、面識もあったが、その作品は全く性格の異なるものである。この二人と一緒に展示する試みは面白く感じられた。展示を観た後、敷地の外にあるクレーのお墓を訪れた。見つけるのに手間取った程、そのお墓はひっそりと在った。クレーは生前、自分の作品をめぐるこんな大きな施設ができると思っていたのだろうか。お墓のつつましさもまた、クレーらしいような気がした。

パウル・クレーの作品

クレーは生涯に相当な数の作品を制作したが、どの作品も、クレーらしさに満ち満ちている。そこには大仰な身振りや主張はなく、どちらかという可愛らしかったりユーモラスだったりするのだが、その裏に、クレー独特の怪奇趣味的な暗さがあり、そこがまた、味であるように思われる。初期の作品は、このクレーの怪奇趣味が前面に押し出されたものであったが、チュニジアで色彩に目覚めた後は、色彩というフィルターによって怪奇趣味的なものは背後に隠されるようになる。

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示⑩ 照明

作品の展示がひとまず終了すると、次は照明を当てる作業にとりかかります。照明でまず留意しなければならないのは照度の問題です。作品の色や質感を効果的に演出するためには照明は明るい方がよいのですが、あまり強い光を当てると退色や変色の原因になります。美術館での照明は一般的にキャンヴァスに油彩で描かれた作品ですと150から200ルクス、紙に水彩や鉛筆で描かれた作品ですと50ルクスというのが一つの基準となります。一般的な事務室の照度が200から250ルクスで、手元を照らすために蛍光スタンドの照明をそれに加えると軽く1000ルクスを超えますので、美術館の展示室の照明はかなり暗めといえるでしょうか。そのため、来館者の方からは、会場が暗すぎて作品の細かな部分がよく見えなとか、キャプションや解説パネルの文字が読めない、というご意見を時々頂戴します。しかし、人間の目というのは実によくできていて、会場に入った瞬間は多少見づらくとも、次第にその暗さにも慣れて、やがて照明のことなど気にすることもなく作品に没頭することができますようになります。しかし、筆者は一度だけ想像を絶するような暗さの中で作品を鑑賞した経験があります。もちろんそれはジェームズ・タレルのような光と視覚の問題を扱った現代美術の作品などではなく、想像を絶する暗闇の中に展示されていたのは誰もがよく知る19世紀の絵画作品。場所は美術ファンであれば誰

「この世では理解されるすべのない私は死者とまだ生まれざるものとの間に住んでいるからである創造の核心には常よりもやや近くしかし道はまだはるかである」

(瀧口修造訳)

これは、クレー自身の言葉であるが、この世では理解され得ないと自分自身感じているような、彼独自の世界を持っていることが、その創造の源でもあったと思われる。私たちはクレーの作品の中に色彩の豊かさや美しい形態、可愛らしい表現やユーモア、楽しげなモチーフを見出すと同時に、彼の心の奥深くにあるものも感じ取っている。あるいは、私たちはそこに惹きつけられるのかもしれない。

多彩な才能をもつパウル・クレーは音楽家でもあり、ヴァイオリンをこよなく愛した。作品の中にも音楽的な要素が随所に見られる。音楽を主題にした画家はクレーだけではないが、クレーの場合には、演奏する者としての音楽への愛も込められているのだろう。パウル・クレー・センターは音楽演奏用のホール

もが知っているパリのオルセー美術館でした。

それは今から20数年前、確かオルセー美術館が開館(1986年)して間もない頃だったと思います。当時の美術界の話題を独占していた観のあるオルセー美術館を初めて訪れた私は、駅舎を改装したこの広大な美術館に展示された19世紀美術の名作の数々を楽しんでいました。そして、この美術館のハイライトとも言える、最上階に並べられた印象派の作品を堪能した後、次の小部屋に入った時、驚きのあまり私はしばし呆然としたのでした。真っ暗でほとんど何も見えない！そこに展示されているのが、ドガやマネ、ルノワールといった印象派のパステル作品であることは、部屋の手前にあったパネルの説明で承知していましたが、中に入っても何が展示されているのか、すぐには判別できないのです。しばらくして目が慣れてくると、ようやく画集などでお馴染みのドガやマネの図柄がぼんやりと浮かび上がってきました。いやはや、ここまでするとは。同業者として、作品の保全に神経を使うのは十分理解できますが、ここまで暗くては鑑賞も何もあったものではありません。最初の驚きは、失望へと変わり、やがて怒りの感情すら湧き上がってきました。こんな展示をするぐらいなら、収蔵庫に眠らせておいたほうが余程マシではないか。それまでの満ち足りた気分がいつべんに消し飛んで、とげとげしい気分では私は美術館を後にしたのでした。恐らく私と同じ感想を抱いた人が大勢いたのでしょう、次にオルセー美術館を訪れた1年ほど後には、問題の部屋の照明は、常識的なレベルにまで明るくなりました。過ぎたるは及ばざるが如し、とはまさにこのことでしょう。違うかな。(F)

屋市美術館、岡山県立美術館、福島県立美術館を巡回するこの「ベン・シャーン」展も、福島第一原子力発電所の事故の影響から、一時は開催が危ぶまれる状況になりました。さいわい関係各位の尽力により、予定通り開催できることになりましたが、海外(今回はアメリカ合衆国のみ)からの借用作品は、福島を除く3館のみへの出品となりました。アメリカ美術のコレクションで知られる福島県立美術館が準備の中心を担ってきていたため、私たちはこの決定に複雑な思いを抱かれましたが、今、気分を新たに仕事に取り組んでいます。



クレーのお墓

をもち、そこでさまざまなコンサートを行っている。音楽家でもあったクレーを絵画だけでなく音楽によっても語ろうとしているのだ。

パウル・クレー・センターと名古屋市美術館

パウル・クレー・センターは、クレーという一人の画家をめぐるあらゆる情報を有する施設である。そこには、コレクションがあり、展覧会場があり、コンサートホールがあり、子供のための施設がある。そして充実したクレーのアーカイヴがある。クレーのことを知ろうとするならば、このパウル・クレー・センターに行けばかなりの情報を手に入れることができるだろう。それに対して名古屋市美術館は「エコール・ド・パリ」、「メキシコ・ルネサンス」、「現代の美術」、「郷土の美術」という四つの柱のもとに作品を収集・展示する施設であり、それらに関する情報を有する施設でもある。名古屋市美術館の収集方針は、パウル・クレー・センターに比べれば幅広いが、日本の公立美術館の中ではかなりの的を絞ったものであり、なかでも「メキシコ・ルネサンス」のコレクションは日本の美術館唯一といえる充実度を誇っている。そこには、日本

感想ノートから

「レンブラント 光の探求／闇の誘惑」

2011年6月25日(土)－9月4日(日)

今回のレンブラント展には、9万人を超える方々にお越しいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。展覧会の出口で自由に記入していただく「感想ノート」にも、様々なご意見が寄せられました。

その中で特に多かったのが「会場が寒かった」というご指摘です。オープン当初、展示室内は21.5℃に設定されていました。これは、作品をお借りしている海外の美術館から、気温と湿度、照度についての条件が課されるためです。欧米の美術館は20℃前後に設定することが多いのですが、高温多湿の夏の日本には合いません。ある美術館からは20℃が上限という条件が提示されたりもしましたが、交渉して上限22℃まで許可してもらいました。こちらの希望としては23.5℃でしたが、各美術館によって提示される条件は違いますので、一律には納得していただけません。それでも、会期中「クーラーが寒すぎて、ゆっくり見れなかったのがショックでした(泣)」と

日本ではこれまでに二度、大規模なシャーン展が開催されています。20年ぶりとなるこの度の回顧展では、シャーン自身が撮影した写真作品を軸にして、写真によるイメージが創作において果たした役割を紹介し、それを通してシャーンの芸術観や私たちが作品に魅力を感じる理由を明らかにします。シャーンと日本の関係についても紹介します。絵画、素描、版画、ポスター、書籍やレコードジャケットのデザインも、見ごたえ十分の内容です。

この世の不正義に目を向け、人間とはどのような存在でどうあるべきかを作品を通して

でただ1点のフリーダ・カーロの油彩画も含まれている。また、図書室ではメキシコ近代美術に関する書籍も充実している。「エコール・ド・パリ」や「現代の美術」、「郷土の美術」に関しても、年々コレクションが充実してきている。名古屋市美術館もまた、そのコレクションとアーカイヴを生かし、それらをめぐるセンターのような役割を果たしていくことができるのかもしれない。その際、充実したコレクションや資料をどのように生かしていくかということが問われると思う。多くを所有していても、それが観客のために活用されていかなければ意味がないのであり、さまざまな教育普及活動や広報活動を通じて、それらを浸透させていくことも大切なことと考えられる。

パウル・クレー・センターでは展示室以外の施設も充実している。パウル・クレー・センターがもつホールは、名古屋市美術館には現在ないのだが、その代わりに作品に取り囲まれた地下のロビーでコンサートを開催している。この地下ロビーは雰囲気のある場所で、美術館ならではのコンサートが開催できる。収容人数はあまり多くないが、毎回良い雰囲気で開催されていると思う。子供のためのスタジオも名古屋市美術館にはないが、展示室を利用してワークショップを開催することもある。また、夏休みや土曜日などに子供のための鑑賞プログラムを用意している。その拠点となる部屋があれば理想的ではあるが、なかなかその余裕のないのが現状である。

おわりに

パウル・クレー・センターはクレーをこよなく愛する人々によって建設され、現在も運営されている。この巨大なセンターを支えているのはやはり作家と作品に対する敬意と愛情であると思う。美術館の学芸員として勤務する私も、そういった作家と作品に対する気持ちを忘れずに日々の仕事を行っていくことが大事だと改めて感じる。パウル・クレーという画家とその作品が魅力的であるのはもちろんだが、そこに魅力を見出し、それを多くの人に伝えたいと思う人々の心が、センターを活気あるものとしているのだろう。名古屋市美術館もそうありたいと思う。(akko)

いったノートの書き込みを見ながら、やはりこれではいかんと思いましたので、来館者の声を伝えて再交渉した結果、途中から上限23℃に引き上げることができました。「上着の必要性をホームページで注意点として挙げておいていただけると助かります」というご意見もありましたので、会期途中からはそのように告知させていただきました。

また、「版画もおもしろかったけれど、もっと油絵を見たかったです」というご意見、特に「夜警が展示されていなかったのが残念でした!」という声がたくさんありました。《夜警》を日本で展示するというのは極めて難しいと思います。作品が大きいので輸送が困難、ということもありますが、オランダの国民的画家の一番の傑作がアムステルダムで見られないというのは、観光面でも大きな損失となるでしょう。加えて、美術品輸送の保険料が高騰しているという事情もあります。だいたい評価額の0.25%が今の保険料の目安ですから、たとえば100億円の油絵を借用すると、保険だけで2500万円かかります。かつては《モナ・リザ》も日本にやって来たので、完全に不可能とはいえないのかもしれませんが…ひとまず昨今の状況が好転しないと期待もできないといったところでしょうか。(nori)

展覧会 現在進行形

ベン・シャーン
クロスメディア・アーティスト
—写真、絵画、グラフィック・アート—

2012年2月11日(土・祝)－3月25日(日)

16年前の阪神淡路大震災の折もそうでしたが、この度の東日本大震災でも、被害の大きさからいくつかの展覧会が延期や中止になりました。神奈川県立近代美術館 葉山、名古屋

問いかけつづけたシャーンの芸術は、今日を生きる私たちにも安らぎや励ましをもたらし、共感を呼ぶでしょう。

名古屋展の会期には、シャーンの代表作〈ラッキードラゴン〉シリーズの題材となった1954年の第五福龍丸事件の発生日3月1日と東日本大震災の3月11日が含まれています。

会場では、シャーンの思いを手がかりにしながら、芸術の役割や私たち一人ひとりができることに思いをめぐらせる豊かな時間を過ごしていただけるでしょう。

是非、足をお運びください。(み。)

郷土の作家たち

水野 清亭(みずの せいいてい／1893－1920)

夏のある日、市の博物館を通じて市民の方から作品の寄贈についての打診があった。人気TV番組の影響からか、一時期、所蔵する作品の鑑定についての問い合わせが急増し、当初は今回も“その手のもの”と思っていた。だが、「一度見てもらいたい」として送られてきた写真には、ある趣の品格と清新ささえ感じさせる二曲一双の屏風が写っていた。そこで美術館からさほど遠くないご遺族宅にお伺いし、実作品を拝見することにした。ご当主の話によると、その作家は祖父の弟に当たるが夭逝したため、その後は「遺品」としてそのまま保管されていたという。ほとんど開けられた形跡のない屏風筆筒が数棹あり、そのなかに作品が保管されていた。

作家の名前は水野清といひ、「清亭」という雅号を名乗った。調べていくと、清亭は名古屋に生まれ、最初地元の画家に入門し、四条派を学んでいたらしい。大正3(1914)年には、第八回文部省美術展覧会(文展)に初入選を果たし、その後三年連続して入選している。幸運にも今回、その三点の作品は確認されたが、四条派の写実性を継承しながら、やがて装飾性を獲得して行く過程を見せるそれらの作品は、制作からおよそ97年もの歳月を筆筒の中で“眠っていた”ことになる。1917(大正6)年には京都市絵画専門学校本

どこがおもしろい?!

今回のテーマは、アメデオ・モディリアーニが28歳頃に描いた《立てる裸婦(カリアティードのための習作)》です。当館で人気の《おさげ髪の少女》と比べると、よりミステリアスな雰囲気が漂っているようですが、皆様の目にはどのように映っているのでしょうか。

「石でできている女の人みたいだった。リカちゃん人形のミイラばんみたいだった。」(ティーオンさん 10歳)

「東南アジアの美術を思わせる昔の仏像のような印象です…やっと思ひ出しました！アンコールワットにありそうな女神の仏像のようです。」(道洋さん 58歳)

「東洋のイメージと西洋のスタイル(八頭身的なもの)が交ざりあった感じがします。組まれた手も仏像のようではなく現代人のよう…いろいろな文化がまざった魅力にあふれた作品だと思います。」(くまさん 48歳)

「表情が無いのと、妙に細いので、人形のように感じました。首やウエストに継ぎはぎのようなモノが見られて、人間とは思えない非人間的な魅力を感じました。」(白砂糖さん 14歳)

「モデルを描こうとしながら、同時に内面をより表出させようとしている様に感じました。ヒザから下が短く、臀部、肩まわりが大きく描かれているのは女性に“母”を求めているから？色々と考えたくなる作品です。」(うにやんさん ？歳)

「3歳の子どもが絵を見て『ばいばい ばいばい』と言いました。ばいばいとはおっぱいの事です、丸くて目を引くので見てすぐ分かるようです。他の写実的な裸婦の絵よりもこちらの方が子どもの興味を引きつけるようです。モディリアーニは《お下げ髪の少女》のような繊細に人物を描くイメージを持っていますが、この絵のような大胆なタッチの絵も描くのかー、と意外に思いました。でも顔を見るとやはりモディリアーニらしいと思います。子どもが「ばいばい」と言うので、そこから目が離れなくなりました。簡単に描かれているようでいて優しい女の人の印象を受けます。この絵が好きになりました。」(嘉子さん 39歳)

「はだかだからさむそうだけど でもなんでわらっているのだろう」(はやとさん 6歳)

「後ろの青い影みたいのが不気味で怖い感じ(´ω´)なのに笑ってるから余計に不気味です。」(キャサリンさん 20歳)

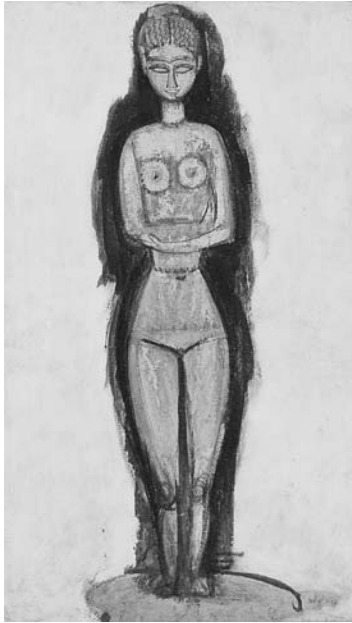
科を卒業。同期に榊原始更(1895－1969)、一期下に岡本神草(1894－1933)、福田平八郎(1892－1974)が、また二年上の別科には甲斐莊楠音(1894－1978)がいた。才気溢れる錚々たる若き俊英たちの中にあって、在学中に三年連続して入選したのは、水野清亭だけである。だが、当時の画壇の正しく最高水準を見せ、権威やアカデミズムを形成し始めた「文展」に対する“反動”として、近代的自我に目覚めた個性的表現が派生、胎動してきたのもまさにこの時期であった。

始更や神草、さらに甲斐莊らは卒業の翌年、つまり1918(大正7)年、小野竹喬、土田麦僊、村上華岳等によって創設された《国画創作協会》第一回展に出品している。“京都に於ける最初の近代絵画理念”の発露ともされる《国画創作協会》に賛同した同期生が次々と“反・文展”へ、そして新たな“時代表現”を模索していく中で、清亭はどのような表現を目指したのだろうか。

卒業後の清亭の活動は、現在までのところ、全く不明である。京都に留まって制作を続けたのか、それとも帰名したのか。彼はその後わずか三年でその短すぎる生涯を閉じることになるが、今日となっては、その原因すら確認できていない。(J.T.)



水野清亭 《春麗》大正3(1914)年



アメデオ・モディリアーニ 《立てる裸婦(カリアティードのための習作)》1911-12年頃

「まず始めにうけた印象としては安定や落ち着きでした。表情がほほえんでいるのと形がほぼ左右対称だからでしょうか。あと色使いや画面構成がデザインとしてとても現代的にかっこよく感じます。裸婦自体は女性の体としては不自然で美しい体型ではないはずなのに、デザインとして見るとすごく美しい。安定してるのにアンバランス、なのに安定してる、みたいな。矛盾した印象が魅力的だな、と感じました。」(耳さん 21歳)

モディリアーニが祖国イタリアからパリにやってきたのが1906年、ちょうどその頃から、パリに住む新進の芸術家たち(ピカソやドランなど)の間で民族芸術、とくにアフリカの仮面や人形がブームになっていきました。ほどなくしてモディリアーニもその影響を受け、一時期油絵から彫刻に転向、面長で大きな楕円形の目をもつ頭の石像を作るようになりました。《立てる裸婦》はちょうどその最中に描かれたもので、「習作」とあるのは、おそらく石像を彫ることも念頭において描かれたアイデアスケッチと考えられるためです。「カリアティード」とは、建物の屋根などを支える柱が女性の彫刻になっているもので、有名なところではギリシャ・アテネの神殿の女人柱があります。モディリアーニの場合はアフリカに限らず、エジプトやカンボジア、古代地中海文明などの様々な遺物から靈感を受けているようで、これらは当時パリの博物館等でも目にする機会があったようです。個人的には、首もとや腰にみられる点線は、アフリカのどこかの部族に見られるようなタトゥを意識したのではないかと考えています。(nori)

八島 正明(やしま まさあき／1936－)

1936年、三重県員弁郡藤原村(現・いなべ市藤原町)に生まれる。父親の仕事の関係で名古屋市に転出するも、1944年郷里に疎開。終戦直後、栄養失調と天然痘により幼い妹を失う。三重大学では日本史を専攻、副専攻として美術も履修した。1959年に卒業した後は蜂蜜の行商などを経て桑名市で産休代用教員として採用されるが、9月下旬の当直の夜、伊勢湾台風に遭う。1961年、地元出身の画家浅野弥衛の知遇を得て出品した美術文化協会展に初入選、その後は会員として発表を続ける。1974年の美術文化協会展出品作《放課後》が翌年第18回安井賞展で安井賞を受賞、1976年東京での個展を機に多くの注目を集めるようになる。美術文化協会展に出品し始めた頃は複数色の絵具と筆を用いて神道の世界に通ずるような主題を描いていたが、1970年頃からモノクロームの画面を木綿針で引っ搔く線描技法で人物のシルエット(影)を描き出すようになり、現在に至る。

影に引き付けられた直接の動機を、大学在学中、友人から広島原爆の閃光熱で石段に

イベントレビュー

写生会

「ゴリラを描こう！」&ワークショップ
「メイキング・キング・オブ・ゴリラ」

常設企画展「池水慶一 毛深き人たちー東山動物園のゴリラたち」(2011.9.13－10.23、常設展示室3及び地下ロビー)は、名古屋市東山動物園のゴリラをテーマに従来の展覧会とは異なる展示方法を導入しました。作家の池水慶一氏からの提案を受け、展示の一部に子供たちの表現も取り込み、紹介することになりました。

展覧会に先立ち、5月には東山動物園での写生会を、9月には休館日に美術館の展示室でワークショップを開催し、応募していただいた市内小学生4～6年生の皆さんに参加してもらいました。ワークショップ「メイキング・キング・オブ・ゴリラ」は、台風の影響による中止・順延に関わらず、27名の子供たちが集まってくれて、賑やかで楽しい制作の現場に立ち会うことができました。

ゴリラのシルエットにも見える発泡スチロールによる大きな人(ゴリラ)型に5～6人一班として自由に描いてもらいました。当初、子供たちにとってその画面(約3m×2m)は大きすぎるのではないかと思いましたが、いざ描き始めるとその集中力はすさまじく、正しく“アクション・ペインティング”



イベントガイド

■特別展「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」

アメリカの社会派作家ベン・シャーンの間、興味あふれる芸術を、絵画、素描、版画、ポスターなど約200点で紹介。あわせて創作に重要な役割を果たした写真をシャーン撮影のオリジナル50点とデジタルイメージなどによる約250点で紹介します。

会期：2月11日(土・祝)－3月25日(日)

料金：一般1,100円・高大生800円・小中生500円

【関連催事】

※①～③2F講堂・無料・先着180名

①記念講演会
日時：3月4日(日)午後2時～4時
内容：「ベン・シャーン 不変の良心」
講師：ロジャー・パルバース(作家、劇作家、演出家)※日本語による講演

②解説会
日時：3月17日(土)午後2時～4時
講師：角田美奈子(名古屋市美術館・学芸員)

③上映会
日時：2月19日(日)・25日(土)午後2時～4時

焼きついた人影の写真を見せられたことだと画家は語る。影だけが、実体の存在したことを語る唯一の証明となったことに衝撃をうけた。自分の大切な人が確かにこの世に存在したことを形に残さずにいられない、その思いがキャンヴァスへ向かわせる。

白い油絵具で地塗りをを行い、完全に乾燥した後、黒で覆う。手につかない程度に乾いたところで割り箸に差し込んだ木綿針で画面を引っ搔き、地塗りの白を丁寧に引き出してゆく。黒一色の世界で繊細な光の筋をさぐっていく様は、巨石や丸太のなかの見えない姿を掘り当てる仏師のようでもある。(3)



八島正明 《行商人》1974年

さながらに、表や裏は当然のことながら、脚の裏までも見事に描き切ってくれました。動物園での写生会では、目の前で動くゴリラに集中したためか、比較的慎重に描いていたようですが、ワークショップではそれぞれが自由に思い描いたゴリラを描きつつ、さらに共同でひとつの作品を作り上げるという制作方法が良かったのか、描く部分が広大だったためか、あるいはただ単に慣れただけなのか、どこか“吹っ切れた”ような印象も受けました。

途中からは、参加者についてきた弟や妹も筆を持ち、会場となった常設展示室3は、最高に賑やかな熱気に包まれました。お昼はみんなで5時間にも及んだ絵具との“格闘”の末にでき上がった四体のゴリラには、グループ全員で話し合っってタイトルが付けられ、展覧会会期中ロビーで展示されました。子供たちの“制作中”は、筆を洗うための水汲みに追い回されましたが、担当者として嬉しかったのは、参加してくれた子供たちが会期中に美術館に来てくれて、自分たちが描いたゴリラの前で記念撮影をしてくれたことです。(J.T.)



内容：「第五福竜丸」(新藤兼人監督作品、1958年、モノクロ、110分)

④ボランティアによるギャラリートーク

日時：2月18日(土)、21日(火)、24日(金)、26日(日)、28日(火)、29日(水)、3月2日(金)、3日(土)、6日(火)、7日(水)、8日(木)、9日(金)、13日(火)、14日(水)、15日(木)、16日(金)、18日(日)、20日(火・祝) 各日とも午前10時30分～と午後1時30分～(要入場券)

※都合により休止する場合があります。

■常設展 名品コレクション展Ⅲ

会期：1月21日(土)－3月25日(日)
エコール・ド・パリ：ヨーロッパ逍遙
メキシコルネサンス：アルバレス・ブラボの写真
現代の美術：イギリスの美術
郷土の美術：女性美を描く

■特集2 北川民次の芸術

会期：1月21日(土)－3月25日(日)

壁画運動の時代にメキシコで活動した郷土の美術を代表する画家 北川民次の芸術を、当館がこれまでに収集してきた所蔵作品すべてを一堂に展示して紹介します。

休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、3月26日(月)－3月31日(土)です。詳しくは [H.P](http://www.art-museum.city.nagoya.jp) <http://www.art-museum.city.nagoya.jp> をご覧ください(ナ)

展評

生誕100年

ジャクソン・ポロック展

2011年11月11日(金)ー2012年1月22日(日) 愛知県美術館

待望久しい展覧会がようやく実現した。ポロックといえば、言わずと知れた抽象表現主義の最重要作家であり、小中学校の美術の教科書にも登場するほどの歴史的な存在だが、その全貌を知る機会は日本ではこれまで一度もなかった。作品の希少性、脆弱性に加えて、重くのしかかる莫大な経費など、数々の難問をクリアして開催にこぎつけた関係者の努力にまずは敬意を表したい。44歳の若さで事故死したポロックが残した絵画作品は約400点と決して多くはないが、本展にはその内の一割の作品が出品されており、さらに素描や版画を加えた計64点によって構成されている。初期の地方主義やメキシコ壁画運動の影響を強く受けた作品から、ピカソやミロなど、ヨーロッパのモダニズムの洗礼を経て、ポロックのトレードマークともいえる絵の具を画面にたらし込む独自のオールオーバー絵画の誕生、そして色を失った最後の黒い絵画まで、4章に分類された作品群は見ごたえ十

分であり、時代を駆け抜けた画家の軌跡が見事に浮かび上がってくる。とりわけ1950年前後の、ポロック絶頂期の作品の数々は、半世紀以上の時を経た今もなお新鮮な喜びと感動を見るものに与えてくれる。そして発表当時「カオス」と酷評された絵の具の重層する画面が、いかに詩的な美しさに満ちているかをあらためて教えてくれる。重なりあう絵の具が生み出す画面の深い空間性と心地よいリズムは、作品の前に立つものを釘付けにし、いつまでもそこを離れることを許さない。図版ではこうはいかない。やはり本物を前にしなくては、といった当たり前の感想が思わず口をつく。会場には次々と傑作を生み出したイースト・ハンプトンのアトリエが実物大で再現されており、床に撒き散らされた絵の具の跡までもが克明に復元され、鑑賞者はその上に立ってポロックの創作を追体験できる仕掛けになっている。日本初というだけでなく、当分次なる機会が巡ってくるとは思えない。必見の展覧会である。(F)



ジャクソン・ポロック《インディアンレッドの地の壁画》1950年（テヘラン現代美術館蔵）



会場風景

ポロックの「伝説」の実像

まさに鳴り物入りといった感じで開催されたポロック展。「伝説のアーティスト、日本初の回顧展」というコピーを読むと、ポロックの回顧展が日本では21世紀になるまで開催されていなかったこと自体に驚きを覚えます。第二次世界大戦以降、世界の美術の中心地となったニューヨークで活躍したポロックは、アメリカ合衆国が生んだ最初の現代美術家として誰もが知る世界的なアーティストです。日本へは早過ぎる死(1956年)後の1960年

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

動物園はどこへゆくのか

科学館の改装以来にぎわっている白川公園ですが、個人的に2011年は動物園とのご縁に恵まれました。研修で横浜動物園ズーラシア、仕事で名古屋の東山動植物園、所属する学会の行事で東京の多摩動物公園と富山市ファミリーパーク…これほど短期間に複数の動物園に足を運ぶことも珍しいですが、おかげで各園を比較でき望外の楽しさでした。特に興味深かったのは富山市ファミリーパークです。ここはライオン、トラ、キリンやペンギンなどの人気動物を飼育する一方で、里山に生息するタヌキやニホンザル、ツキノワグマなどの日本の固有種や、ニワトリ各種(名古屋コーチンも!)、ヤギ、ばん系馬など家畜として人間と共生してきた動物たちを積極的に展示対象としています。動物園と書いて海外の野生動物や絶滅危惧種を連想する人には地味に感じられるでしょう。しかし山本茂行園長は自戒をこめて語ります。「動物が人里へ降りてきて農作物を荒らし、人を襲うようになったのは山にエサがないことだけが原因ではない。里山の手入れを怠って山から降りてくるクマを発見しにくい環境を作り、生ゴミや木から落ちた果実を放置して自ら動物をおびきよせていることに気づかない…つまり私たち人間が彼らの生態に

代から雑誌や研究書などで紹介されるようになりますが、残念なことに、代表作が展示される機会はありませんでした。まさにポロックは、最初から「伝説」として、すでに現存しない現代美術家であり、しかも代表作を実際に見ることのできない状況のなかで、さまざまな言説ばかりが先行するかたちで、日本に迎えられたのです。当時、かなり影響を受けた

日本の現代美術家たちも多かったのですが、時間の流れのなかに次第に忘れられていったのです。「予想外に鑑賞者が少なくて残念だ」とか、「本領である大作が少なくて物足りない」とか、やや否定的な感想を聞きながら会場を訪れました。確かに鑑賞者は疎らなのですが、初めての回顧展としては充分な内容の展覧会でした。「アクション・ペインティング」の巨匠の個展と考えるならば、不満もあるかもしれませんが、ポロックという現代美術家が、新しい美術の創造に野望を抱き、偉大な画家たちの作品と苦闘するなかから、どのように自己の芸術を模索、探究して、自己の芸術を確立し、新たな展開を目指したのかという濃密な生き方を明らかにする回顧展と見るならば、見応えのあるものでした。しかし同時に、いささかやりすぎ感のある宣伝にもかかわらず、ポロックでさえ忘れられている現状に不安を感じざるを得ませんでした。(sy)

疎くなったからだ」と。長く日本人の身近にいた動物たちが今どんな状況にあるのかを知らせ、彼らと住処を分かち合い共生していくにはどうしたらよいかを来園者に投げかけ、共に考えることも園の使命であると、取り組みを通して強く訴えておられました。近年では北アルプスに生息する国の特別天然記念物ニホンライチョウの将来を考え、系統の近いスパーバルライチョウの飼育・繁殖方法の研究にも取り組みはじめています。運営する側が自らの持てる資源(保有する動物・立地環境・土地の歴史など)の価値を丁寧に検証し、柔軟に行動する姿勢を目の当たりにして、動物園とは何だろう?と考えました。慣れ親しんだ美術館の定義と照らし合わせて出した答えは、「体験を通じて、野生動物から家畜、ペットにわたる動物との幅広い関わり方を考え、自然環境に目を向ける学びの場」。こどものための遊戯施設でも見世物でもなく、これこそが成熟した社会における動物園の姿ではないでしょうか。(3)



スパーバルライチョウ

展評

山田七菜子 ドローイング展
「眠る為のより深い化粧、別の日の為の
イミテーション、歩く為のほくら」

2011年11月19日(土)ー12月28日(水)
ギャラリーHAM

「子どもが描いたような絵」と言っては失礼だろうか。でも、まるで子どもが自分の思い浮かぶイメージを自由に描くように、彼女自身が投影されているのだろうかと思わせる女の子や女の子の想像の世界がのびのびと描かれている。風景や男女の姿など、まるで夢の断片が次々に描かれていくような感じだ。作家によれば思いつくイメージを描いていくうちに、絵がどんどん変わっていくのだという。前回の個展が油彩作品のみを展示したのに対して、今回はドローイングのみを展示したということだが、ドローイングが油彩作品のエスキス(下絵)であるといったことはないのだそう。ドローイングはドローイングとして、思い浮かぶイメージの自然の変化や手の自然な動きに従って描かれる。油彩を描くときに絵の具を入れてパレットとして使われていたプラスチックの容器もいつのまにかキャンバスと化してそこにも絵が描かれていく。ドローイングだけでは、空間が締まらないとし



《舟の秘密》2011年

BOOK

『ディエゴ・リベラの生涯と壁画』

加藤 薫 著、岩波書店、2011年

名古屋市美術館の4つある作品収集対象のひとつは、「メキシコ・ルネサンス」と呼ばれるメキシコの近代美術作品です。ディエゴ・リベラ(1886-1957)は、その「メキシコ・ルネサンス」を中心となって牽引した作家です。西ヨーロッパの美術の紹介と受容が今日の日本でごく普通に行われているのに比べて、それ以外の地域については、依然として限られたものに止まっています。国情が安定していない地域が多い現状では、なかなか状況は変わらないのかもしれませんが。若い頃にパリに暮らし、ピカソやモディリアーニなどとも交友関係にあって、キュビズムやエコール・ド・パリの作家として評価を得ていたリベラは、帰国後にメキシコ・ルネサンスの巨匠となって、アメリカ合衆国にも活躍の場を広げています。(本書では、「アメリカ合衆国」となっています。このあたりに著者の見識が現れています。)

このようにヨーロッパやアメリカの美術とも関わりのあったリベラでさえ、これまで日本語で読むことのできる本格的な評伝や研究書はありませんでした。リベラは、近年、日本でも話題を集め、急激にファンを増やしたメキシコの女性画家フリーダ・カーロ(1907-1954)の夫でもあり、彼女との関わりで書籍などで触れられることはあったものの、本書が我が国で出版された初の単行本になります。A5判の索引などを含めて850ページを超える本書は、最新の研究成果も押さえられており、簡便にリベラを知るための基礎文献として今後なくてはならないものになるでしょう。(名古屋市美術館の収集と研究も取り上げられています。)

ひとつ残念なのは、価格の高さです。税込み18,900円は誰にでも手の届く金額ではありません。著者があとがきで語っているように、メキシコ・ルネサンスの残る2人の巨匠ホセ・クレメンテ・オロスコとダビッド・アルファロ・シケイロスについても、日本語で読める単行本を是非ものしていただきたいと思うのですが、それと並んで、より多くの人に貴重な著作が読まれるような手立てはないものかと思えます。昨今の出版事情は厳しいものがあります。昨今とかならないものなのでしょうか。(み。)